

# 「神石高原アートプロジェクト2013 仙養ヶ原シンポジウム ードキュメントー」実施を通しての持続的な野外公共彫刻の研究

報告：土井満治

## はじめに

### 仙養ヶ原シンポジウムについて

土井 満治

2011年から2014年の8-9月の期間、計4回にわたって、彫刻の社会的意義、およびパブリックアートの新しいかたちの研究と実践を目的として、仙養ヶ原ふれあいの里(広島県神石郡神石高原町)敷地内にて滞在制作と作品展示をおこなう「仙養ヶ原シンポジウム」を行ってきた。参加作家は主として広島市立大学芸術学部教員、学生、広島で活動する彫刻家、他大学で石彫を学んでいる学生、作家らである。

### 経緯

広島県神石郡神石高原町内の有識者は、かねてより、仙養ヶ原付近で産出される比較的大きな玄武岩を用いて、アート作品による地域活性化を検討していた。

そこで2011年2月初旬、県内では唯一、石彫制作の環境が完備され、さまざまな地域連携事業を行ってきた本大学芸術学部美術学科彫刻専攻に、協働事業の依頼があった。

そこで地元有識者と広島市立大学芸術学部教員らを中心として「神石高原アートプロジェクト実行委員会」を組織し、仙養ヶ原での継続的なアートプロジェクトの実施を行うこととした。

### シンポジウムという形式

このプロジェクトを実行するうえで我々が掲げた1つの柱が、最低3年間の継続事業とすることであった。単発的でイベント性の強いものにするのではなく、また、いたずらに完成作品だけを求めるのではなく、地域社会との交流を通して、場所の歴史性や風土を理解していくなかで、じっくりと作品制作に取り組む必要性があるのではないかと感じていたからだ。

そしてまた、その継続性の中で制作も持続されること、つまり「展示して終わり」なのではなく、展示後も検証を重ね、改善点を模索していくなかで、相互作用的に作品制作を進めることによって、野外彫刻の新しい可能性を提示することができるのではないだろうか考えたからだ。

もちろん、それは「工期が無限の建設事業」のようなもので、実現することは難しい。しかし仙養ヶ原は滞在施設、制作場所、素材、展示場所という4拍子そろった貴重な環境を有しており、これを推進するうえで適した場所であった。

以上の考えに沿ってこのプロジェクトでは、1959年オーストリア、サントマルガレーテンで開催された「彫刻シンポジウム=複数の彫刻家がひとつの場所に集い、現地制作、展示をおこない地域間や

作家間の交流を行う」という形式を採用することにした。このスタイルは、その後ヨーロッパ各地に広がり、1963年神奈川県真鶴で開催されたものが日本で最初の「彫刻シンポジウム」である。日本では60年代以降、都市部を中心とした野外に彫刻作品を設置する活動が活発になり、日本中の街中に大規模な彫刻作品が設置された。それと平行して、日本各地で「彫刻シンポジウム」という形式での野外彫刻展が盛んに開催されるようになった。

そこでは、彫刻による魅力的なまちづくりをおこなうことに関して、一定の成果はあったものの、どちらかといえば質より量といった傾向が強かったのも事実であろう。

これは、日本における彫刻シンポジウムの多くが、短期集中型で、評価の安定した作家の完成作品を求める成果主義的な色合いが強かったために、美術と社会の関係性についての考察が深化されないうまま継続されたことが要因の1つに挙げられる。同時に、完成作品の質の判断(美術批評)が希薄なまま制作・設置が実施されたことが、恒久設置される野外彫刻としての魅力を減じていったことも理由として考えられるだろう。

本来野外での作品設置は、美術館や画廊等のホワイトキューブよりもはるかに複雑で多様な条件を踏まえなくては成立しない。耐久性と安全性を確保しつつ、周囲の環境や景観と彫刻作品の相互作用を、可能な限り良質なものにしていくためには、必然的に長期間の検討を重ねていかなくてはならない。しかし、日本でこのような長期的な形式で彫刻シンポジウムが開かれた例は、ほとんどないだろう。

上記の問題を踏まえ、本プロジェクトでは、従来の彫刻シンポジウムという形式を参考にしながらも、そこに含まれる問題点を洗い出し、周囲の環境や景観とより豊かな相互関係を築く野外彫刻作品(site specific sculpture)の新しい形式を探求することとした。

### 彫刻の社会的意義およびパブリックアートの新しいかたちの実践的研究

古代ローマおよびイタリアルネサンス時代の大理石彫刻群や、日本における仏像彫刻、駅前のモニュメントなどに代表されるように、「彫刻」という分野は、歴史的に見ても他の美術分野に比べて、公共空間での社会性をもった表現が要請されてきたと言えるだろう。

ところが、日本においては90年代の景気低迷後、モニュメントや大型彫刻制作の機会が減少し、彫刻自体の表現内容も、公共性や普遍的テーマを持ったものから、作家個人の表現や、現代美術の文脈の中での先端性を追求するものにシフトしてきた。大学等教育機関での研究や教育の場でもこの傾向は顕著で、多様な芸術表現を展開する一方で、先に挙げたような彫刻の特性である本質的な公共性に基づく、パブリックアートの研究機会は減少しているといえる。

本プロジェクトでは、これらの問題を踏まえ、現地滞在制作による地域社会との持続的な対話を通して、社会とのいままでに無い形式でのパブリックアートの実践的研究をおこなうものである。

また、学内での教育カリキュラムや制作活動だけでは獲得したい、社会との直接的な結びついた実践研究の場を若手芸術家、学生らに提供することで、社会のニーズに対応できる応用力を持った人材の育成も目指した。

### 「仙養ヶ原石彫シンポジウム 2011」の実施

このプロジェクトは当初3年間の継続開催を前提として計画し、結果的には4年間、計4回行った。

第一回として平成23年8月22日~9月11日の期間で「仙養ヶ原石彫シンポジウム 2011」を開催した。研究組織員および学生、卒業生ら6人が、広大で緑豊かな環境のなかで存在感を持つ表現を検討しながら作品制作と展示を行った。

神石高原町付近では、中国地方では珍しく、2~5トン級の柱状節理の玄武岩が産出される。しかし現地付近の庭石や石垣に用いられる程度で、石材として流通することはほとんどない。

玄武岩は、彫刻材としてはよく用いられ、世界的な彫刻家イサム・ノグチの石の作品にも、玄武岩を使用した優れた作品が多く残されている。本プロジェクトでは、地域団体の全面的な協力のもと、石材の無償提供を受けることができた。作品に使用した玄武岩の他に、景石として敷地内に多数の石を配置し、景観整備を行った。

神石高原町で産出される玄武岩(仙養石)は、亀裂が多く、無傷に見える内部にも細かな傷がはいっており、鑿岩機や矢などによる石割の工程において割れる方向をコントロールすることは不可能に近い。これらの問題から、作品の造形にはかなりの制約があった。一方で柱状節理の持つ独特の造形と外皮と黒みの強い割肌の特徴を生かした、様々な表現を実践することができた。

また、期間中「芸術が社会と共振するために」をテーマとした地元有識者や住民らとの公開討論会を開催した。コーディネーター：藤井匡(東京造形大学准教授) パネリスト：井田勝己(東京造形大学教授)、村井進吾(多摩美術大学教授)、前川義晴(広島市立大学教授)

藤井による野外彫刻や彫刻シンポジウムに関する問題提起にはじまり、井田勝己による鳥取県米子市で20年にわたって開催した彫刻シンポジウムの事例紹介、村井進吾による彫刻家主導による野外彫刻展「雨引きの里と彫刻」の事例紹介、前川義晴によるヨーロッパにおける彫刻シンポジウムの実際の紹介を踏まえて、パネリストらによる意見交換や質疑応答を行った。これまでの野外彫刻の展開を踏まえて、新しいかたちの彫刻のあり方を模索していくうえで、示唆に富んだ重要な討論会となった。

滞在制作の期間中、討論会や日常的な話し合いを重ねるなかで、地元有識者らから神楽の上演が可能な野外舞台の制作という提案があった。神石高原町も古くから神楽が盛んな土地であるうえに、敷地に仙養神社が隣接することから、プロジェクト終了後にその案について検討をし、2012年に実現を目指すこととなった。

### 「仙養ヶ原シンポジウム 2012 —石舞台と風の宴—」の実施

平成24年8月19日~9月8日の期間で「仙養ヶ原シンポジウム 2012 —石舞台と風の宴—」を開催した。前年のプロジェクトで課題となったのが、作家個別の表現を重要視した結果、全体としては散漫でまとまりがない展示風景となったことである。これを解決するためには、中心的な役割を果たす規模の大きな作品が必要であると考え、また、地元有識者らからの神楽の上演可能な舞台制作の提案を受けて、参加作家らによる共同制作による大規模な野外彫刻としての「石舞台」の造成をおこなうこととした。

もう一つの課題は、石彫という限られた領域の表現だけは、かえって石の魅力は発揮されにくく、石に対比するような、仮設的で軽やかな作品が必要ではないかということであった。これに関しては、デザイン工芸学科立体造形専攻の学生や教員と共同でプロジェクトを進めることで、解決を図った。彫刻領域では「石舞台」、デザイン領域では「Wind Banquet (風宴)」という2つのテーマを導入し、それぞれに固有の環境に沿った表現のあり方を提案した。

彫刻領域では、前川義晴の主導のもと「石舞台」を参加作家が共同で制作した。この作品では、神楽や野外能などの上演ができること、また長期間の野外設置に耐えられることを踏まえて、いままでにない独自の造形性をもった野外彫刻作品として自立することを目指した。また「石舞台」制作と平行して、作家個別の彫刻作品の制作を行った。前回の実施内容をよく検証し、改善点や不備を洗い出し、社会的価値のある野外彫刻の制作を各作家が実行していった。

デザイン領域では、デザイン工芸科立体造形専攻の教員と学部生を中心としたメンバー7名が、8月20日より14日間前後滞在し、Wind Banquet (風宴)をテーマとした展示を行った。緑豊かな丘陵地の広大な空間で、どのように作品を展開することができるのか考え、作品制作と展示を行なった。

また、オープニングイベントとして尾道市立大学芸術文化学部と共同で、「キャンプキャンパス仙養ヶ原 2012」と題した石舞台を囲んでのキャンプファイヤーとシンポジウムを開催した。「機能と美 - 地域社会と芸術との共振 -」をテーマとして、講師に藤井匡(東京造形大学准教授)を招いて、美術と社会との関係を歴史的かつ実践的な視点から講演していただいた。また、各大学の地域社会での実践的な取り組みの発表を行なった。尾道市立大学の発表では、

深遠な文化や歴史的な背景をもった尾道という場で、芸術がどのような役割を担っていくべきか、空き家再生プロジェクト等具体的な事例を挙げながら発表を行った。

昨年に引き続き、2回目の開催となった本プロジェクトであったが、出品者の大幅な増員(6名→14名)や、石彫だけではなく、「風の宴」をテーマとした仮設的であるが自由な素材の展開、「石舞台」という大規模野外作品の展開などがあり、当初の予定よりもかなり規模を拡大させた。それにも関わらず、なんとか予算内でプロジェクトを運営(石舞台完成は来年度に持ち越し)できたのは、やはり滞在施設、制作場所、材料(石材)、展示場所がコンパクトにまとまったこの「仙養ヶ原」という場所の利が多いに働いたからであると同時に、地域団体、個人の全面的な協力があってこそのものである。石彫作品に対照するかたちで企画した「風の宴」では、体感型の作品や広大な空間をコントロールする作品、色彩豊かな作品などが出そろい、一見地味になりがちな彫刻展に彩りや多様な可能性を与えることに成功した。特に遊具として機能する作品などは来場者から大変好評であった。

「石舞台」の制作では25m×40mという広大なエリアを重機等で造成し、迫力ある造形を作ることができた。さらに敷地から公道を挟んで対面する仙養神社の正面軸線上に舞台を設置することで、神楽の奉納上演を可能とした。一方で、仙養石を用いた彫刻制作では、既述の通り、加工難度が高く時間を要するため、制作者の技量によって作品内容が大きく作用し、全体的に作品の質を上げることが難しかった。また広大な展示空間においても、十分発揮される効果的な表現の追求が必要であると痛感した。これらを課題として、次年度に向けてさらなる改善を行なっていくこととした。

#### 「仙養ヶ原シンポジウム 2013 ―石舞台と風の宴―」の実施

平成25年8月19日~9月15日の期間、2012年と同じコンセプトを周知して実施した。2011年度、2012年度からの実績を踏まえて、過去の彫刻作品の内容を検証し、再制作や配置替え、新規作品の展開など多様な角度からの制作活動と展示を行なった。

石舞台の制作では、2012年度に造成した基壇部に仙養石を加工した石畳を施行したのち、周囲に自然石を配し完成した。屋根等は予算の都合で制作が見送られた。

初年度、次年度に設置した石彫作品に関しても、再制作や配置変更を行い、改善を図った。仙養ヶ原のような広大な自然環境の中で展示する際、特に考慮すべき重要な点は、想定される鑑賞地点における樹木と作品との関係性と、地面の起伏形状であることが改めて認識された。樹木は垂直方向の構造物として自然環境に明白な影響力をもっている一方で、地面の起伏は意識して注視しなくてはなかなか判別しがたい。一見平坦に見える場所であって

もいざ作品を設置する局面になると、問題が健在化するという場面が何度かあった。大地の形状は一見ランダムに見えて、実際には地質と雨水による侵食の秩序の中にあり、複雑で細密でありながら全体として重力方向に不可逆かつ特定の方向性をもっている。この特性を十分考慮して設置場所を選定しなくては、正面性、動線、高低差によるサイズの変容など、作品内容と環境がちぐはぐなものになってしまう可能性がある。

このプロジェクトでは天候に恵まれず、台風や集中豪雨なども重なり、制作期間の半分以上が雨天であった。特に野外で制作している彫刻分野では予定した制作期間を確保することができなかった。

過去2年間の経験で、作家らも環境や作品に対して客観的で多様な視点を持つことが出来るようになり、作品制作を通して、改善点や課題意識を作家間で具体的に共有することが可能となった。その中でも最大の課題は、美術作品が公共空間で成立するためには、なんらかの〈機能〉を持つ必要があるのではないか、あるいは望むまざるにかかわらず持たざるを得ないのではないかということである。

これらの課題に焦点を絞って、次年度に実践することとした。

#### 「仙養ヶ原シンポジウム 2014 ―@プレイグラウンド―」の実施

2014年8月24日~9月15日の期間、本学研究組織員、学生ら15名が、広島県神石高原町「仙養ヶ原ふれあいの里」の広大な敷地を舞台として、新たに「プレイグラウンド=遊び、活動の場」をテーマに掲げ、これまでの枠にとらわれない自由な素材を用いて、自然環境のなかで体験可能な機能を持った野外美術作品の制作と作品展示を行なった。

予算の都合上石彫制作は見送られた。

#### パブリックアートが持つべき〈機能〉

一般的に美術作品は必ずしも機能を持っている必要はなく、むしろ芸術の純粋性、独立性を損なうものとして注意深く排除される傾向がある。しかしそれは、ホワイトキューブ等設置場所の影響が少ない状態で作品が設置されることを前提としてのことで、パブリックアートのように、環境が全体として、作品が部分として相対化される場合においては、作品が純粋に独立してあるということは難しく、むしろ作品は、全体の中で全体を構成する個々の固有の働きを有することで初めて自立しうるものではないだろうか。

本研究では、以上の3年間の実践を踏まえて「パブリックアートが持つべき機能」に焦点を絞り、具体的に検証し実践を行なっていった。

仙養ヶ原のような郊外の野外レジャー施設などでは、一般的に

シーソーやアスレチックジムのような遊具を設けることで「遊びの場」を提供しているが、それらは、室内や都心部にあってもその機能を失わないという意味で、その場所固有の体験を提供するものではない。

このプロジェクトでは「遊びの場」を「発見の場」と同義とし、仙養ヶ原という固有の環境に依拠した、多様な視点や考え方を発見するための装置としての美術作品を提示することを目指した。

石彫制作が見送られたことで参加作家は大幅に入れ替わったが、過去3年間の展開を参考にすることで効果的な空間の活用ができ、かつ制作のテーマを限定することで、作品群に一定の方向性が生まれ全体として統一感のある展示内容になったと思う。個々の作品の精度には学生個人の能力によるばらつきが目立ったが、各作家がテーマや展示環境を考慮して素材や技法を一から組み立てていくことで臨場感のある展示内容になった。

## おわりに

以上のように4年間を通して、仙養ヶ原という一種の箱庭空間で実験的展示を行ってきた。私を含め、若手表現者が野外展示空間で実践的な展示を行う貴重な機会を得ることができた。このプロジェクトの当初から掲げた「展示して終わりではなく、継続的に検証と改善を行う」という姿勢に沿えば、今後もこの仙養ヶ原でのプロジェクトは続けていく必要がある。最初にも述べたが、これは制作場所、展示場所、滞在場所、多様な自然素材の4拍子そろった貴重な環境である仙養ヶ原であるからこそ、可能であると思われる。実践→検証→改善の持続的な活動を行い、それを記録していくことで、野外彫刻の新しいかたちを今後とも模索していきたい。

最後に、この実験的で結果が出にくいプロジェクトに、全面的に協力していただいた神石高原町、仙養ヶ原観光開発組合、地元団体、有識者の方々にこの場を借りてお礼もうしあげます。ありがとうございました。



## ブログ

日々の活動の記録。

# 2011

2011-08-18

仙養ヶ原へ出発前日。

石材加工に必要なエア工具や石の運搬に使用するベルトスリングなど様々な道具を積んでいく。



2011-08-19



仙養ヶ原へ現地入り。

ここ、神石高原町は山頂近くにあり、標高約 700m にもなる。写真にあるような大きな玄武岩を使って制作を行っていく。一辺の長さが約 1.5~2m 程、重さは 2~5t 近くあり、ごろんとした印象の存在感のある石だ。

2011-08-21



それぞれが使う石を、作業場に据える。単管を組み、日除け、雨避けの役割を果たすシートを張り、エア・電気工具を使えるよう配線をした。

石が決まったところでミーティングを行い制作方針を決めた。

石の元の造形に負けることなく、人が手を加えることによって抵抗のある形を目指す。

2011-08-23



各自、いろんな道具を用いて石を削っている。

鑿(のみ)、カッター、チップパー(空気で鑿を振動させて石をとる道具)、グラインダー・・・など

使う道具によって風合いや石の色、輝きも違ってくる。

2011-08-24

前日とは一転日差しが近い、暑いと嘆く私たちに、参加作家の藤江さんが六甲山で展示をする作品の一部をテントとしてかしてもらった。

現場が華やかな色で彩られ、涼しげ。



2011-08-27

【討論会と交流会】

討論会『藝術と社会が共振するために』

を開催する。

討論会が始まる前に、制作場を見に来てくださる方が多数いた。



三和公民館にて、討論会を行ないました。司会、土井先生。コーディネーターの藤井匡先生の進行。パネリストの先生方は左から、東京造形大学・井田勝巳教授。多摩美術大学・村井進吾教授。広島市立大学・前川義春教授。

御三方に、それぞれの経験談を画像資料と共に発表があり、彫刻シンポジウムの意義について、来場者なども交えての意見を交換し合った。

2011-08-29



夜は焼肉屋「やまびこ」さんで地元の方とお酒を飲み交わした。  
とても賑やかで楽しかったです。  
美味しい野菜、お肉、お酒…再度トマトもたくさんいただいた。



地酒の「神雷」、香り豊かでした。

2011-08-30



大学だとなかなかタイミングが合わなくて見る事ができないそれぞれの制作過程、さらに制作を始める日も一緒だという事で自分の制作と比較する事ができ、あまりできない事を経験していると感じる。

2011-09-04



仙養石を割る。  
まず、深さ7センチぐらいの矢穴をあけ、矢を入れてゆく。  
矢をハンマーで叩き、方向性のある衝撃を与え、石を割る。

石自体に無数の傷(ひび)が入っていて、衝撃を与えても傷の方向に割れてしまう。扱いが難しい石のようだ。



2011-09-06

過ぎた台風は、秋の気候を連れてきた。見事な秋晴れ。  
前回の途中経過から一週間が経った。残り一週間、制作も最終段階に差し掛かりつつあり、それぞれ意気込んでいる。



2011-09-07

仕上げには今回、120番の砥石を使って水磨きで表面を整えていく。



2011-09-09

【制作最終日です。】制作最終日。



フォークリフトでゆっくり石を運んでいく。バックで、ゆっくりゆっくり・・・  
初年度、作品を設置する場所は管理センター正面の芝生内だ。  
作品を何処に置くかを参加作家で話し合い、最終決定する。

2011-09-10

地元の職人さん達に協力していただき、作品を設置場所に据え置く。



2011-09-11

【クロージング交流会】

無事、作品設置を終えクロージング交流会を開いた。  
地元の方に限らず、広島市内からも多くの方に駆けつけていただいた。





土井満治の作品解説の様子



作品と作家を前にしての意見交換も盛んに行われた。



作品解説のあと行われた交流会では、継続的な展開に向けての話し合いも行われた。

仙養ヶ原は、素材(玄武岩)、宿泊施設、制作場所、展示場所という4拍子そろった貴重な環境だ。これは継続的な展開を考えるうえで費用面のハードルを下げられるだけではなく、野外彫刻展示という経験を積む、貴重な実践の場にもなる。ぜひとも継続的な展開を続けていきたい。

## 2012

2012-08-18



前年に引き続き現地の石を用いた「石彫」に加えて、機能性をもつ大規模なアースワークになるであろう「石舞台」。もうひとつのテーマ「風の宴」は本学立体造形分野の有志たちの企画によるもので、二週間の制作期間で行なう。

2012-08-21



デザイン組はまず作品を設置する場のスケールを知るために、広い空間に農業用テープを張っていった。測量するとともに、広い空間をどう生かすか、考えるきっかけをつくる。

2012-08-23



それぞれのやり方で、素材の性質を模索していく。



作品を仮設置。

何度も遠くからみて、設置位置を確認する。

デザイン組は制作期間も二週間と短いので、かなり計画的に進行していくようだ。

2012-08-24



石舞台制作では、地盤造成前に、作業領域の芝を刈る必要がある。芝刈り機を使い帯状に芝を刈っていく。

2012-08-26



土をユンボで掘っていき、石舞台の基本的な形を造形する。  
 作品設置のための図面を作成中。  
 作品の設置範囲が思ったより広く、材料量の調節を考える。



雨の多い仙養ヶ原。室内での作業も行なわれている。  
 「風神様の服」制作中。  
 風の効果を上手く活かせる、軽い布をミシンで縫い合わせていく。

2012-08-28

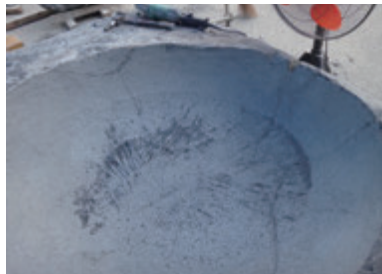


「SWING VISION」制作風景。仙養ヶ原以外で制作している仲間も居る。

2012-08-29



「内包されたかたち」制作風景。一つの石を二つに割り、偶然できた凹凸から形の着想を得ている。



「コバルトブルー」制作風景。  
 半球の形に入り込んでの作業。  
 丁寧にピシャン（石の表面を細かい点状に削っていく道具）をかけ、磨きの行程に移っていく。



立てて制作していた石を、協力して横にする。



「Wind Catcher」制作風景。傾斜に等間隔に配置された虫取り網。風を受けた方向に反応し、流れてははためく。

2012-08-30



今日は東京造形大学の井田先生が来られました。みんなで先生の近況、シンポジウムの経験談などを伺った。



仙養ヶ原アートプロジェクトの記事が中国新聞に掲載される。



作品名「風神様の服」  
 巨大な服の中に入って、風と一緒に遊ぶ。  
 風のおかげで大きくふくらむ。

2012-09-02







竹の杭を打ち込んで止めていく。

2013-09-08

石彫作品の制作もついに最終日を迎え、石を据えていく。「内包されたかたち」設置。トラックで設置場所まで持ってきた作品をユンボに引き継ぎ、そのまま地面へ据え置く。



作品解説の様子。各々が作品のコンセプトや思いを語る。

2012-09-05

造成を終えた石舞台。芝を張り直す作業を行なった。分担しながら、参加者総動員で着実に進めていく。程よく重量のある芝のロールを抱えての作業。クレーター上部から徐々に下ってゆく。



2012-09-09

シンポジウムクロージング交流会を開き、たくさんの来場者に来ていただいた。



斜面での作業。クレーター上部から芝をころがし打ち手に渡す。45度位ある斜面での作業。斜面の芝は雨で落ちないように1つ1つ、



夜にはスクリーンを使っでの地域密着型の活動について発表、交流の場を設けた。藤井匡先生からは「芸術と地域の共振についての実例報告」、吉田先生から「広島市の都市計画について実例報告」、交流会に参加くださった尾道大学の学生から地域密着型プロジェクト「家プロジェクト」発表があり、情報交換を行なった。

# 2013

2013-08-18

現地入り。



2013-08-21



「透明な輪郭」制作風景。テントに運び込んだ石を早速彫り始めている。削岩機で石を割るための矢穴をひたすらあけてゆく。

2013-08-22



完成した縁石の中に、端から均一になるようにコンクリートを流していく。ミキサー車からコンボがコンクリートを受け取り、縁石まで運ぶ。最後は職人さんの手作業によって平面を出す。

2013-08-22



「風球」制作風景。ダンボールで型を作り、その形に沿うようにして細い竹串を組んでいく。

2013-08-23



「星空の棚田」制作風景。レーザーの水平器を使い水平の線を引く。基準線の無い自然石でも垂直・水平がとれるすぐれもの。

2013-08-26



石舞台の石貼りの様子。石板を切断し最後のつじつま合わせの仕上げをする。水でぬれた石畳は鏡のように青空を映し出した。

2013-08-28



ビシャンをかけて細かく形を整えていく。かなり振動の強い工具なのでちょっとした工夫をして持ちやすく。前日三等分に割った石の一つを加工中。ほかは後ろにある二つの石。



「螺旋水紋」制作風景。ビシャンで丁寧に模様を彫り込んでいく。加工部分の位置が高く、重くて強く振動する工具を支えるためはかなり握力をつかう作業。



「流れ動くもの」制作風景。仙養の檜林の間伐材をつかった作品を制作中。滑らかな有機的な形は生き物のよう。

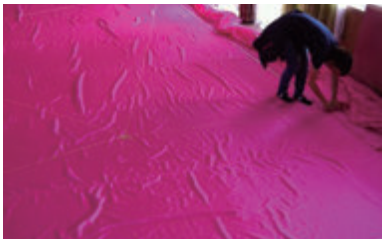


2013-09-01



「ニョロ」制作風景。自分より大きい石のサイズに苦戦中。ビシャンでなだらかな面をつくってっています。

2013-09-02



80畳の床がピンク一色に。大きな布を広げでの作業。



「カゼノウツワ」制作風景。

10m弱程の竹を形のベースにして風にはためく布を張っていく。

2013-09-05



「やまのみなも」制作風景。かなり大きなビニール材。銀色は風景を鏡のように反射している。

2013-09-06

明日はいよいよオープン！



「風球」設置風景。ソフトな素材は自然の影響をととても受けやすい。設置場所の選定は重要だ。



「ラブ プレーン」設置。仲間で協力しての設置。

巨大な布をかなり高い位置に張る。仙養ヶ原の風雨激しい気候の厳しい条件に耐える事ができるような工夫を設置の最終段階にも行なう。

2013-09-07



「透明な輪郭」設置。雨の中、5点の石彫作品の設置作業を行う。

水平器を使い、四つに分かれた巨石のパーツを組み合わせていっての設置。微調

整がとても難しい。



2013-09-07

公開制作期間は終わり、展示期間が始まる。



設置し終えた作品を楽しんでくれている子ども達。

「四角いアメンボ」白いキューブは風を受けた方向にふわふわと動き、不思議。

2013-09-08

完成した作品の作家達によるアーティストトークを行なう。







真新しい石舞台での宴が催される。講師に藤井匡先生（東京造形大学准教授）も招いての講義も行なわれた。他での地域密着型プロジェクトの事例や仙養ヶ原の3年間の歩みをみることが出来た。



遠路はるばるアーティストトークに参加してくださった皆様はもちろん、8月の公開制作開始頃から見守って下さった皆様など、たくさんの方々に支えられてのシンポジウム。三年目も制作の機会を与えて下さった仙養ヶ原の方々に感謝。

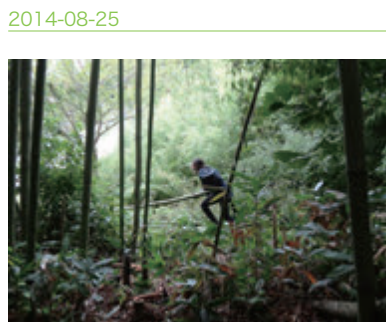
## 2014

2014-08-24

今年も始まりました仙養ヶ原シンポジウム。



アーティストトークの様子。関係者をはじめ遠方からも、たくさんの方々にお越しいただいた。



2014-08-25



夜はキャンプキャンパス。完成してすぐ、



作品に使用する竹を200本ほど伐採した。

竹プロジェクト経験者による主導もあり、作業は滞りなく終了。竹採りは初体験の人が多かったようだ。

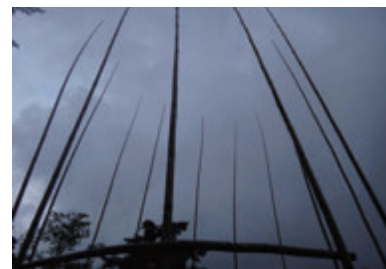
2014-08-27



ぶ厚い雨雲。雨が降ったり止んだりの気候の乱れが目立つ。そんな中でも作品の形はだんだんと現れてきた。



2014-08-28



「700」制作風景。13本の10mはあろうかという竹が力強くそびえ立つ。これらは作品の基礎となる支柱の役割を果たす。

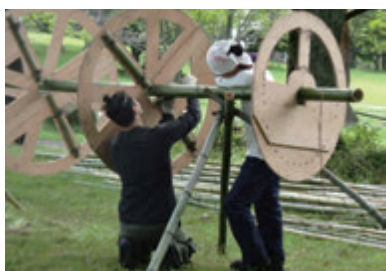


作業場には大量の竹が転がっており、制作には十分な素材の量。



「大黒様餅まきシーン」近影。木材で組んだいかつい身体にもかかわらず、この朗らかな笑顔。思わず笑ってしまうシュールな雰囲気。

2014-08-29

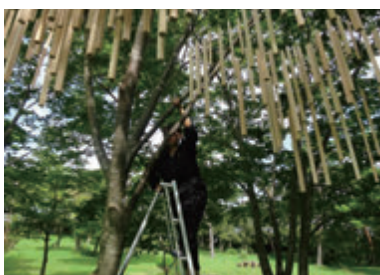


「仙養ヶ原発・桃源郷行」制作風景。天気が悪い状態が続いている。制作ははかどっており、どんどん形になっていく様子を見ると完成がとても待ち遠しい。

2014-08-30



「bambee」制作風景。手刀を使っの細かい作業。くり貫いた形はモダンな幾何学模様。フランスで竹は珍しい素材のようだ。



「木鈴」制作風景。風や手で触れると吊り下げられた木材がカラコロンと優しい音を出す作品。葉の緑とのコントラストが涼しげだ。

2014-08-31



「空」制作風景。仙養ヶ原の緑多い景観に、溶け込みつつも主張するかのような迷彩柄の矢印記号。矢印の中には寝そべれるスペースがあり、くつろぎながら仙養ヶ原の空の移り変わりを観賞することができる作品。



「lost penguin」制作風景。60体ものペンギンを発泡スチロールで制作している。着色作業と成形作業の同時進行。ころころとした形のペンギン達は見るだけで和やかな気持ちになる

2014-09-01



「700」制作風景。3人での共同制作の作品。協力して縦に埋め込んだ竹に細く裂いた竹を編むようにして巻いていく。

2014-09-02



「57本の水平線」制作風景。仙養ヶ原は丘陵の高低差が激しい。水平に水糸を張り、地形の形を可視化、体感できる作品。最終調整を行っている。



新しく採集してきた大量の竹。





「雲と眺める風景」制作風景。2013年制作作品のリタッチ。小さい石彫を造り、過去の作品に組み合わせる。

2014-09-04



「bambooooooo」制作風景。輪切りにした竹を編むように結んでいった。



「700」制作風景。かなり高さが出てきた。内部から見ると、空や芝生の緑が竹に透けてとても涼しげだ。

2014-09-05



「石舞台」制作を開始してから三年目、前年より間を置いての施工である。石舞台から、仙養ヶ原に隣接する息長神社へ向けて、神楽奉納の祈りを込めた石を据え終える。



「仙養ヶ原発・桃源郷行」制作風景。薄く割られた竹を竹壁のように張っていき、固定する。竹の若々しい緑色が、巨大なロケットの形を造形していく。

2014-09-06

【アーティストトーク】

参加者のみなさん、思い思いに作品を楽しんでくださり作家としてもうれしい限り。作品それぞれが仙養ヶ原ならではの風土から着想を得たものになっている。

